

言葉の遅れのある子の言葉を促す方法、教えます

楡の会こどもクリニック院長

石川 丹

I. 初めに

言葉の遅れた幼児は日本語学習の苦手な子、と考えると、その子に合った言葉を促す方法を考え出し易くなります。

なぜなら、苦手なことが分れば、逆に得意技が分ります。そうすると、「得手を伸ばせば不得手は付いて来る」という諺の考え方のもと、その子が得意技を使ってまねすることがし易い手本を示すことが出来ます。

まねは学びの基本ですから、その子にとってまねし易い手本があれば、その子の学びを促すことができます。

以下に、言葉の発達の道筋と言葉の発達を促す方法を述べます。

II 幼児の日本語学習の道筋

1) 乳児の聴覚

どこの国の赤ちゃんも、生後8ヵ月までは、母国語に無い母音、子音を識別しています。生後1～3ヵ月の赤ちゃんの声、クーイングや喃語を大人が真似できないのは、日本語に無い母音や子音を発しているからです。

生まれてから1歳0ヵ月で初語を言うまで、赤ちゃんは毎日朝から晩まで日本語ばかりを聞いて過ごしているので、つまり日本語を聴いて学習していることになるから、日本語としての赤ちゃん言葉「マンマ」「ブーブー」「ワンワン」を言うようになるのです。

2) 初語はなぜ「マンマ」「ブーブー」?

例えば、1歳0ヵ月の子どもを抱っこしている大人の目の前を自動車が通ったとしたら、大人は自動車を指差しながら子どもに「ジドウシャ」ではなく「ブーブー」と声を掛けします。

これはなぜでしょう？ 大人は子どもが「ジドウシャ」と発音することが無理であることを知っていて、「ブーブー」なら子どもは言い易いはずと無意識のうちに思って声掛けしています。子どもからすれば、まねして言い易い手本を示されていることになります。

3) 1歳0ヵ月の子どもの得意な発声音

1歳頃の子はパピブペポのパ行、バビブベボのバ行、マミムメモのマ行を言うのが得意です。両唇音といって上唇と下唇に力を入れて閉じた後、破裂させるように口唇を開いて出す音です。

しかし、サ行、ザ行、タ行、ダ行はまだ発音できませんので、「ジドウシャ」という言うことは不可能です。

4) 学び易い教育を受けた結果、赤ちゃん言葉をしゃべれるようになる

大人は1歳0ヶ月の赤ちゃんは「ジドウシャ」は言えないが「ブーブー」なら言えるはずとあって、子どもがまねて言い易い手本を示していることになります。

大人が自動車を指差しながら赤ちゃんに「ブーブー」と声掛けするのは、大人が赤ちゃんに学び易い教育をしていることに他ならないのです。

5) まねは学びの基本

学習には手本が必要です。手本はまねし易い方が良いに決まっています。言葉の遅れた子、つまり日本語学習が苦手な子に、その子にとってまねし易い手本を示すのが大人の役割です。

6) 「得手を伸ばせば不得手は付いて来る」

ある大人がその子がまねし易い手本を見つけられたら、その人はその子の得手を見つけて、苦手な学習をやり易いように教育できた、ということになります。決して甘やかしてはありません。

7) 1歳半児の言葉、1～2音節の繰り返し

1歳から1歳半に掛けて増えてくる言葉には特徴があります。1歳半の子が言う「ブーブー」「パパ」「ママ」「ワンワン」「ニャンニャン」「バイバイ」は1音節ないしは2音節の繰り返し語です。同じ発声音を繰り返す言い方がこの時期は得意と言うことになります。「マンマ」「ネンネ」「イタイ（痛い）」も繰り返しに近い特徴を持つ子どもにとって言い易い言葉ということが出来ます。

ですから、この時期は大人は、繰り返し発声音、を意識した言葉掛けをすることが大切になります。

8) 擬声語

犬の鳴き声は“わんわん”、猫の鳴き声は“にゃーにゃー”と聞こえるから、大人は犬を指差して「ワンワン」、猫を指差して「ニャンニャン」と声掛けして教えているわけです。分かり易い教育の結果、子どもは犬をワンワン、猫をニャンニャンと名づけられるようになる、つまり言葉を覚えるようになるというわけです。

怪獣を「ガオー」と名づける時期もあります。こういう言葉を、鳴き声を模した言葉、と言う意味で擬声語と言います。滑り台を「シュー」、ボールを「ポーン」と名づけてたりするのも同じような言葉の使い方というふうに出ることが出来ます。

ろれつがまだうまく廻らない時期はこの擬声語が言葉の発達の促すことになるのです。

9) 『その子語』

「うちの子、ゴニョゴニョといろいろ言いますが、意味が分からない宇宙語をしゃべります。」とお母さんが心配する子は決して珍しくはありません。そのような子でも、良く聴いてみると言いたいことが分かる場合があります。

例えば、オダツビ＝お休み、ナイナイ＝ばいばい、オイショ＝よいしょ、イイシャ＝電車、ボコチ＝みかん、キティチャ＝救急車、チョーボーバ＝消防車、アオカー＝パトカー、ビビビガイ＝テレビ見たい、ベッタッタ＝ぶつかった、イカイカ＝ピカピカ、アイトゴワシタ＝ありがとうございました、こおいしいええ＝これ良いねえ、こいわ＝こんにちは、などです。

こうしたその子独特の言い回しを『その子語』と称します。ちゃんとした日本語になっていませんが、それぞれの子はしっかり言葉をしゃべっているつもりです。だから『その子語』と称しますが、さやかちゃんなら『さやか語』、翔平君なら『翔平語』と名づけるのが良いと思います。

10) 『その子語』ってなぜそうなる？

なぜ、ろれつがはっきりしない『その子語』に成ってしまうのかというと、その子にとっては日本語より『その子語』の方が発音し易いからです。日本語の発音は難し過ぎるから上手く言えないのですが、『その子語』なら言い易いから言えちゃうのです。

11) 『その子語』から日本語へ

習い事は、難しいことを努力して必死になって頑張るより、気楽にやり易いやり方を何回も繰り返し練習した方が上手になります。「習うより慣れろ」という諺もあります。

大人は『その子語』を言う子の言おうとしていることを分っちゃってあげて、言いたいことを正しい日本語でそれとなく返して行くと、それが練習になり、だんだん日本語らしい発音になって行く子はたくさんいます。

ちゃんと言わないと分ってあげないよ、という態度を大人が取ると、子どもは『その子語』もしゃべらなくな

っちゃって、返って日本語が育たなくなります。

III. 脳内辞書を引く

1) 表象の言語化

人間は頭の中でまず思ってからしゃべります。思ってからしゃべるまでのスピードは大人では新幹線なみですが、子どもの場合はもう少し遅いです。

しゃべる前の思いには言葉が使われていないので表象と言います。人間は言葉を用いない思い、つまり表象してからそれを言語化します。表象の言語化を頭の中でしてから、声にして外に出します、つまりしゃべります。

でも、大人は外に出さないで、頭の中でぶつぶつ言うことがあります。頭の中でぶつぶつ言う場合を内言語と言い、内言語を使ってあれやこれや思い巡らすことを思考と言うのです。

子どもの場合、言葉を発しなくても表象はしています。例えば、哺乳瓶をあてがっても、揺らしても泣き止まない赤ちゃんが、おむつを換えたときに泣き止むことがあります。この場合の赤ちゃんは「おむつを換えてちょうだい」と表象していた事になるのです。言葉をしゃべるなんて有り得ない赤ちゃんだって表象しているんです。

言葉を発するという事は頭の中の表象を発声音にするということです。

2) 頭の中で辞書を引く

人間は大脳の前頭葉で表象したら、次にこめかみのあたりの脳で表象を言語化します。こめかみのあたりの脳の部分を言語運動中枢（別名：ブローカ野）と言います。別な言い方をすると、この部分に辞書があることになります。

大人の場合、ペラペラ良くしゃべる人の辞書は厚く、口下手の人の辞書は薄い、という言い方が出来ます。

子どもではどうでしょうか。6ヶ月の赤ちゃんの脳にはまだ辞書がありませんが、1歳になると1ページだけぐらい、つまり「ワンワン、ママ、パパ、マンマ、バイバイ」などしか書かれていない辞書が出来初め、初語を言えるようになるのです。

3) 子どもの辞書は薄い

大人に比べて子どもの辞書は誰でも薄く、子どもの言葉が発達するということは脳内辞書を厚くするという事に他ならないのです。

老人になると言葉がなかなか出て来ない場合がありますが、こういう場合は長年使って来た辞書がほころび始めた、あるいは破れてしまったというふうに言うことが出来ましょう。つまり、辞書を引くのに時間が掛かって、なかなか言葉にならないというわけです。

4) 頭の中に辞書作り

言葉の遅れた子の療育とは、脳内辞書作りのお手伝い、というふうに言えるのです。

IV. まね（模倣）は学びの基本

1) 赤ちゃんの模倣学習の仕方

発達に心配の無い10ヶ月の赤ちゃんの顔の前に大人が顔を出して、両目をつぶったり開けたりしてまばたきを見せると、赤ちゃんは最初のうちは手のひらを結んだり開いたりします。その後、大人がまばたきをさらに見せてあげると、次は口を開けたり閉じたりします。さらに大人がまばたきを見せることを繰り返すと、やがて赤ちゃんも自分の目をつぶったり開けたりできるようになります。

このようにして、示された手本の模倣（まね）が完成し、学習が成立します。

2) 分っちゃいるけど身体を思い通り動かさない

上記の赤ちゃんはまばたきする大人の顔を見て、まぶたが開いたり閉じたりする動き、つまり開閉という抽象性は最初から頭の中で分っていると考えて差し支えはありません。別な言い方をすると、開閉というイメージ（表象）は出来ていることを意味します。

赤ちゃんは、目を開閉したいと思った、つまり表象したのですが、まだ練習が足りないために目の開閉は難しく、そのためにまずはやり易い手の開閉をしたのです。その次には、次に動かし易かった口を開閉し、練習が進み練習効果が出て来て、初めは難しかった目の開閉ができるようになったというわけです。

3) 学びの完成には手本を何回もまねして練習することが大切

どんな人でもすぐに手本通りに上手にできるようになるわけではありません。練習が必要です。

例えば、英会話塾に行って外人さんに教わる場合、いきなりペラペラ流暢にしゃべれる人はそうは居ません。最初は外人さんの発音を良く聴いてまねして練習です。英語を聴き取るのが上手な人や流暢にしゃべれる人は英語が得意だから、というふうに言えます。英語が得意でない人は何回も練習が必要になるのです。

中1になって初めて英語を習い、英単語を覚えようとした時、2~3回唱えたらすぐ覚えちゃう人もいますが、そういう人より10回とか20回とかそれ以上に何回も口ずさまないと覚えられない人の方が多いものです。早く覚えられる人は英語が得意だからで、なかなか覚えられない人は英語が苦手だから、というふうに言うことができます。

学習には繰り返しがが必要です。すぐマスターする人はそれが得意だからで、なかなか学習が進まない人はそれが苦手だからで、そういう場合は何回も繰り返して学習しないとマスターできにくいものです。

V. 言葉の遅れを促進させるには、大人が代弁する、ことが大切

1) 思いを言葉に乗せる

どんな人でもまずは前頭葉で思って、つまり表象してから、それを言葉にします。即ち、思いを言葉に乗せる、のです。

2) 言葉の遅れた子は日本語をしゃべるのが苦手な子

言葉の遅れた子は、思いを言葉に乗せる、のが苦手な子です。つまり、思いを日本語に乗せる、のが苦手なのです。

『その子語』を言う子は、思いを日本語に乗せる、のは苦手ですが、思いを『その子語』に乗せる、のは得意なのだと思えるべきなのです。

3) とりあえずは『その子語』を増やす

いきなり日本語をしゃべるのは難しいが『その子語』ならできる子に対しては、まずは『その子語』を増やせば良いんだよ、という姿勢で子どもに接することが重要です。

幼児が、困難を乗り越えて勉強して日本語が上手になるんだ、という気持ちを持つことは難しいと誰でも思います。

だから、取り敢えずはしゃべり易い『その子語』でしゃべってもらい、大人が通訳して、日本語を提示して言葉掛けして行けば、だんだん日本語に近づいて行くことになります。

4) 子どもが言いたそうなことを大人が代弁して言っちゃう

子どもが思いを日本語に乗せようとしてもなかなか言えない時、大人が子どもに向かって図星を言っちゃったとしたら、子どもはどう振る舞うでしょうか。

「今考えてるんだから答えを言っちゃダメ」とは言わずに、「そうそう、それ！」という気持ちになって、思わずまねして言っちゃうでしょう。

この場合、まねし易い手本を大人が出せたので子どもは学習が早くなった、というふうに言うのが正しいの

です。決して甘やかしたのではありません、良い教育をした事になるのです。

大人は、子どもの気持ちを読んで、子どもが言いよどんでいる時は、まねし易い手本を出すこと、つまり図星を言っちゃうこと、子どもの気持ちを代弁しちゃうことが、子どもの言葉、つまり日本語を育てることになるのです。

VI. 二語文が出るためには

1) 二語文とは

言葉を二つ続けて言うのが二語文です。順番に並べるとのことですから、物事を順番通りにすることと共通しています。

2) 台本通りにする

例えば、ままごとで材料を切ってそれを調理し、作ったご馳走を誰かに勧めるという一連の動作ができるということは、台本通りに活動できている、とすることが出来ます。

次にする行動予定をあらかじめ頭の中に描いて、つまり表象して、その表象を順々に行動化しているということです。行動の連鎖ができています。

台本通りに行動の連鎖をする時に言葉を発すれば、言葉を繋げて発する練習をしていることになります。動作に伴う言葉の練習を繰り返せば、その内に動作無しに言葉だけがつながり、二語文の完成になるのです。

3) 今を語る

ままごとで、おもちゃの野菜を切ったふりをしながら「とんとん、切って」と今やっていることを言葉に乗せ、つまり語り、次いでフライパンで炒めたふりをしながら「まぜまぜ、して」、皿に盛って「ママ、どうぞ」などと、今を語れば、二語文の完成につながるのです。

4) 二語文を増やすには

子どもが動作を連鎖してやっている状況を見たら、大人は子どもの動作を実況中継するように言葉掛けします。そうすると子どもはその動作をしながら声掛けられた言葉をついついまねして言ってしまい、やがて自ら言葉をつなげて言うようになり、二語文を言うようになるのです。

VII. 二語文の次は助詞

1) 助詞の種類

「僕の～」というふうには所有を表す「の」、一緒という意味の「と、も」、感嘆詞の「よ、ね」、「やって」「見て」などのお願いを意味する「て」などの助詞がまずは出易く、主格を表す「は、が」を発するようになるのは後の方になります。

助詞が出てきたら、文法が意識されることになりますので、論理思考が可能になります。この段階になると言葉は、伝える道具、から、考える道具、に進歩したことになります。

2) 大人が助詞をはっきりさせて言葉掛けする

二語文を言えるようになったら、大人は助詞をはっきり発音して声掛けした方が子どもの言葉は伸びます。

「パパ、一緒」でなく「パパも一緒」、「上、行こう」でなく「上に行こう」、「ママ、食べるよ」ではなく「ママは食べるよ」など、助詞をはっきりさせた言葉掛けが大切です。

VIII. 今を語り合うのが会話の始まり

2～3語文、助詞が出たら次は、今やっていること、今見ているものを語って聞かせることが、子どもにとってはまねし易い手本になります。

1) 今を語り、会話する

例えば、白い犬を見たら「白い犬がいるねえ」「可愛いね」「跳ねてるねえ」「ボールを追っかけてるんだ」とか今見えている様子を言葉に乗せて、子どもに聞かせてやって下さい。そうすると子どもは初めのうちはおうむ返しですが、やがて子どもも今見えていることを、例えば「大きいねえ」「元気だねえ」「赤いボールだ」とか言って、自分の意見を言うようになります。

今見えている物事を語り合う、これが会話の始まりです。

見て思ったこと、つまり表象を言葉に乗せるのが、今を語ることであり、自分の意見を言うことであります。

IX. 過去を語る

今を語れるようになった次は、過去の経験を、記憶を思い出しながら、語れるようになる段階です。

1) 思い出話、自分語り

「今日～した」「～食べた」「～ちゃんエーンした」などその日の経験を思い出しながら語ることが、質問後に、あるいは自発的に、出来るようになったら、この自分語りをいろいろたくさん言えるように、大人が上手に質問することが大事になります。

2) 凶星の質問をする

例えば、「何して遊んだの？」と質問して、もし子どもが「わかんない」と答えた時に、大人が「あっ、そう」と言ってしまったら会話は続かない。そこで大人は「～じゃなかったっけ？」と凶星でも良いぐらいの質問をする、もしその「～」が凶星なら子どもは、あっそうそう思い出した、という気持ちになって「そう、～した。～ちゃんが～して、先生が怒った」とか言ってお話が広がります。

また、例えば、通っている園の先生に「内の子は今日何してましたか？」などと質問して、子どもがその日にしていたことを教えてもらっておけば、凶星の質問がし易くなり、的中していれば子どもは思い出し易くなります。思い出話をしてもらうためにすごく効果的になるのは間違いありません。

X. ごっこ遊び

ふり、見立て、成り切りを組み合わせた遊びをごっこ遊びと言います。

1) ふり遊び

空のコップで飲むふり、おもちゃの食べ物を口に入れなくて「アムアム」と食べたふりをする、涙を出さなくて泣いたふりや眠ってないのに寝たふり、は虚構の世界を演じていることになり、智恵があるから、想像力があるから、できるのです。

2) 見立て遊び

積み木をもって「ブーブー」とでも言いながら自動車の替わりにして走らせたつもりで成ったの遊びを見立て遊びと言います。これは別な物を代理品にして使うので、応用という智恵があるということを示しています。

3) 成り切り遊び

うさぎになったつもりでピョンピョン跳ぶ、アンパンマンになったつもりでアンパンチする、変身して仮面ライダーに成る、お母さんに成って弟に小言を言う、など他人に成ったつもりで振る舞う場合を成り切りと言います。

ある時は仮面ライダー、ある時は自分になって遊ぶ状態は二重人格状態を経験することであり、仮面ライダーらしく演技をしようという気持ちは自分を操作することに通じます。また、他人の立場で考える練習になります。他人の立場で考えることを、他者視点、と言います。

4) ごっこ遊び

ふり、見立て、成り切りを駆使して遊ぶごっこ遊びは、空想力、想像力、自己操作、他者視点を育て、引いては言葉育てます。

XI. 言葉は代理品

例えば、子どもに「アイスクリーム食べたい、ちょうだい」と言われたら、親は冷凍庫にアイスクリームを取りに行きます。でも、もし「ゲフロールネ、ちょうだい」と言われたら、多くの親は「？」と思うでしょう。

これはなぜでしょうか。アイスクリームは冷たくて室温だと溶けちゃうお菓子という意味は分っていますが、ゲフロールネの意味は分らないからです。ゲフロールネとはドイツ語でアイスクリームという意味です。

つまり、言葉が通じるかは意味が分っているかどうかにかかっています。発音に意味がくっついて初めて役に立つものです。アイスクリームという発音は冷たくて溶けちゃうお菓子という実物ではありません。実物が無くても、発音を聞いただけで分っちゃうわけですから、言葉は代理品と言うことができます。

ゲフロールネという発音には意味がくっついていないから、代理品になっていないということになります。だから、通じないのです。つまり、言葉になっていなくて、単なる発音に過ぎないから通じないのです。

言葉を使う知恵を育てるには、代理品を使いこなす知恵、を育てることが大切になります。

XII. ごっこも代理品を使う遊び

積み木を自動車の代わりにして遊ぶ見立ては代理品を使いこなしていることに成ります。成り切りも自分じゃない仮面ライダーという代わりを使いこなしていることになるのでやはり代理品を使いこなしていることに成ります。

言葉もごっこも代理品を使いこなすという同じ知恵の表現であります。言葉は発声を、ごっこは物や自分の身体を、使いこなしているわけです。

XII. ごっこ遊びをたくさんすれば言葉も豊かになります

ごっこ遊びをたくさんする子どもは代理品を使う知恵が伸びます。

アンパンマンの仕草をしているように見えたら、大人は「アンパンマンに成ってるんだあ、楽しいねえ」とか言って、子どもがそのつもりになってアンパンマンらしく振る舞おうという気持ちを盛り上げることが、ごっこ遊びを育てることになります。

子どもの表象を大人が代弁すれば、子どもにとってはまねし易い手本が示されたことになります。だから、言葉の発達が促されることになるのです。

